

撤退田圃

いなだそういちろう

稲田宗一郎

1985年 夏

曾根賢一が住む「あらふね」は山本盆地の南西部にあり、八月のこの時期、稲は出穂期を迎え、一年中で最も葉の色が濃い季節であった。

賢一が町の南西から北東に向かって流れる犬川で平沼茂を助けたのは、今から三十年前の稲穂が出始めた八月初めであった。

その日は、前日の夜に降った雨も上がり、刺すような日差しを真上から受けた田圃は、土中に溜めた水分を一気に蒸気として吐き出し、肌にまとわりつくような暑さだった。賢一は、幼馴染の平沼茂と遠藤功、井上昌二を誘い犬川に泳ぎに行った。F県の内陸部は海がなく、この地域の子供たちは、地元を流れる犬川や黒川で遊びながら泳ぎを覚えるのであった。四人とも泳ぎは上手い方で、メガネ型的水中メガネをかけ、潜りながらザリガニを捕ったりして遊んでいた。

泳ぎだして二時間は過ぎただろうか。泳ぎ疲れた賢一は、かたくち橋の橋げたに腰をかけ、仲間たちを眺めていた。功と昌二は川から上る仕草をしていた。

「功、昌二、そろそろ、上ろう」

賢一は勢いよく声をかけた。

「そうだな、賢一、上ろう」

功の声がした。

賢一は首を右左に回し茂を探した。ところが、茂はいない。不安になった賢一は、

「茂ちゃんが、いない」

と功に声をかけた。

功も賢一の声聞き川面を探るようにみたが、

「本当だ、茂がいらない」

と大きな声をあげた。

その時だった。賢一がすわっている橋下駄から10m位下流に急に茂が浮き上がってきた。賢一は一瞬ホッとした。と同時に、その川面に顔をだした茂の動きに違和感を覚え、

「茂、大丈夫か」

と大声をだした。

茂は賢一の声に一瞬反応し何か言おうとしたが、そのまま、下流にゆっくりと流され出した。

斜面上った功も、茂の不自然な動きに気が付き、

「茂ちゃん、茂ちゃん」

と大声を出し立ちあがった。

「茂がおかしいぞ」

賢一は橋げたから川に飛び込み茂を目指して泳ぎ出した。

「功、土手の向こうの田圃から稲を引っこ抜き、稲の束を作ってくれ」

と河原を走り出した功に向かい声をかけた。

功は大きくうなずくと、昌二と一緒に田圃に飛び込んで行った。

賢一は、犬川の川幅は5 mから6 mくらいで、深さは2 mくらいなのを知っていた。茂が溺れているのは岸から2 m位だったので、賢一が片方の手で茂の腕をつかみ、もう一方の手に稲わらをつかみ、その稲わらを功達が引っ張れば、茂を助けることができると考えたのである。

賢一は、功と昌二が引っっこ抜いてきた稲わらを確認すると、

「昌二、俺が顔を出したらその束を俺のほうに投げてくれ、功は俺のサポートを頼む」

と大声をあげ、茂の手前から潜り始めた。

賢一は、茂の背中に回り水の中で茂の腕をつかむや一気に水面に顔を出した。

その瞬間、左側に稲わらが見えたので左手で稲わらをつかんだ。

「昌二、引っ張れ」

賢一は必死で叫んだ。

茂の腕を掴んだ右手の感覚が異常なほど重い。稲わらを掴んだ左手はズルズルと滑りだしている。

「賢一、手を離すな」

昌二の声が聞こえた。賢一は「クソッ」と叫び、稲わらは死んでも離すものかと頭の中で叫んだ。

その時だった。茂を掴んでいる右手の感触と稲わらを掴んでいる左手の感触が微妙に軽くなった。賢一が引っ張り上げた茂の体を、功がしっかりと引っ張り川岸にいる昌二に向かって泳いでいた。功が気転を利かせて川に飛び込み、茂を引き上げていたのだ。

「助かった」

賢一はホッとした。このホッとした意識には、賢一自身も「溺れる」との恐怖が一瞬頭の中を駆け抜けたからでもあった。

ようやく岸についた茂は、功と昌二と賢一の3人がかりで岸に上げられた。

岸に引っ張りあげられた茂の意識は朦朧としていた。功が茂をうつむけに寝かせ、腹を持ち上げ大きくゆすった。

「ゴホッ、ゴフォ」

茂はむせび水を吐いた。

その行為を何回か行い、大量の水を吐かせてから、賢一は茂の両頬を平手でたたき、

「茂、茂」

と大きな声をかけた。

2013年春

北の盆地にも遅い春が訪れていた。

「ガッ、ガッ」と土をかき回すプラウの機械的な音が田圃に流れていた。代掻き用のアタッチメントを取り付けた80馬力のトラクターに乗った曾根賢一の姿が遠くに見えた。ヘッドホンを付けた賢一の耳からヒップホップの軽快なリズムが流れていた。

「やっと俺の時代が来た」

賢一の頭には、先月新聞発表された国の農業改革が鮮明に浮かんでいた。

『…農林水産省の奥野経営局長は、規制改革会議の農業改革と農協改革の答申を受け「規制改革会議の基本認識は、農業分野に競争原理が働くような環境を整え『農業を成長産業』と位置づけ、農地集積による法人経営を推進するために農協改革、農業委員会改革、農地法の見直しを実施する。関係機関である農業会議所、JA 全中、全農はこの規制改革会議の答申を踏まえ自主的に改革を実施してもらいたい」と述べた。この奥野案は官邸指導により作成されたものであり、自民党農林族もおお

むね了承したと思われる。この答申を受けて、農協組織は大幅な改革を迫られる…』

賢一は荒船郡西川町の十二代続く農家の長男だった。地元の高校を卒業すると東京のK大学に進学し経済学を専攻した。K大学で民間出身の竹園教授の指導を受けたことが賢一の人生を決定づけた。

「曾根くんは、荒船の大きな農家の後継者だってな」

「ハイ、そうです」

「卒業したら、荒船に戻り実家の農業を継ぐの？」

「ハイ、そのつもりです」

教授は一瞬困ったよう表情を浮かべ、

「私は反対だな」

と力強く言った。

「えッ」

賢一は教授の言っている意味がすぐには理解できなかったが思い切って、

「先生、家を継ぐなっていうことですか？」

「いや、卒業後すぐに継ぐなってことさ。曾根君も今のままの農業のやり方では儲かるとは思わないだろう」

「エーマア、難しいと思います」

「そう思うだろう。今の日本の農業は儲からない。農家の周りには農協がいて、その農協は、本来、農業指導に力をいれるところを金貸業に力をいれ、農業経営指導をやってないからだ。おまけに農協法の存在が市場原理・競争原理のジャマをしている。僕は、曾根君が卒業してすぐ家を継ぐのは反対だ。まず、食料関連の民間企業に就職し、人脈を作り、その後で田舎に帰り、君の経営を法人化し農地を集積し、農協を通さない経営を目指すべきだよ。今から十年後、二十年後には、日本農業も自由化を受け入れ関税が下がり、確実に変わる。農協法も変わる。その時

になって、初めて、日本の農業は、競争原理に基づく成長産業になりうるし、その時こそ、君なんかが中心となり日本農業を引っばっていくんだ」

教授は顔を真っ赤にして熱く語った。

賢一は大学四年になると教授のアドバイスに従い大手流通企業のリゾンに就職し、その会社の農業関連ビジネスの立ち上げに関わった。五年前の三十六歳の時に父親の急死により生まれ故郷の西川町に帰り、流通企業での農業ビジネスの立ち上げ経験を活かし、農業法人を立ち上げ大規模農業を目指していた。

つづく

小説紹介

ルーラル小説 撤退田圃

稲田宗一郎

農業改革、農協改革が実行に移され、農地を集積し法人化した大規模稲作経営が、国政策通りに、日本の農業を支え、地域の中心になりうるのだろうか？

地域農協は本当に改革を実現できるのだろうか？

国の政策に従い、大規模化、法人化に向け突っ走った一人の青年の目を通し、農協の存在価値を問い直す。